

中国・台湾の媽祖巡礼 - その成立・展開・現状について -

The Mazu pilgrimage of Taiwan and China - its formation, development and present situation

矢澤知行 (愛媛大学教育学部教授)

Tomoyuki YAZAWA, Professor,
Faculty of Education, Ehime University

In this paper I would like to discuss the formation, development and present situation of the belief in Mazu (960-987), the protective goddess of fishermen and sailors. Faith in Mazu began in the Fujian area of China after the 10th century and later in the Song, Yuan, Ming and Qing periods (960-1911) developed into a faith held by officials and common people through the giving of titles. As well, with the branching out of the Chinese into the South Seas the area of faith greatly increased. Presently, temples in approximately twenty-nine countries with about five thousand statues of Mazu have been constructed and there are about two hundred million believers. Taiwan has become a very popular place for the belief in Mazu and every year around March 23 of the lunar calendar, which is Mazu's birthday, there is a colorful pilgrimage (jinxiang in Chinese), where participants visit temples in various areas. The representative example of this annual pilgrimage that starts from Jennlann Temple (大甲鎮瀾宮) in the Dajia district of Taichung. Over eight nights and nine days more than one million participants walk 340 kilometers distance visiting 120 temples along the way and then return to Dajia. This pilgrimage, which began during the colonial rule period of Japan, involves the ancestral god of Mazu visiting the smaller branch temples thus reactivating the divineness of the sacred sites. Previously this event was continued by a small portion of devoted believers who were mostly middle-aged or older, but in recent years, people in political circles and the media have actively participated in the administration of this pilgrimage, so the scale of the pilgrimage has expanded and it has become a national event. It differs from the Shikoku pilgrimage because it is held temporarily and in an intensive manner, but it is similar in that we can see the custom of welcoming pilgrims, in other words osettai, is very active and that the numbers of young-aged pilgrims are increasing.

1 はじめに

媽祖は、天妃、天后、天上聖母、天妃娘娘などとも呼ばれ、中国東南沿岸部・台湾を中心に信仰を集めてきた航海・漁業の守護女神である。媽祖に関する先行研究は枚挙に暇がなく、その歴史的展開や各地の信仰への影響などについて、すでにさまざまな角度から詳細に論じられている。本稿では、それらの成果に基づきながら媽祖信仰の成立と展開を概観するとともに、日本を含む各地の媽祖廟をとりまく状況を瞥見する。さらに、台湾の媽祖廟における巡礼行事に着目し、四国遍路との比較の視点も交えながら、その現状や特色について紹介していきたい。

2 媽祖信仰の成立と展開

航海・漁業の守護女神として知られる媽祖信仰は、10世紀以降に中国の福建地方において成立した。その後、宋元明清代の賜號を経て官民両側面をもつ信仰として展開し、さらに華人の南洋進出とともにその信仰圏は広範に拡大していった。本節ではその一連の過程を概観する。

まず、媽祖に関する伝承記録にはさまざまなものがあるが、とりわけ代表的なのは、明代に湄州廟の照乗が撰した『天妃顯聖録』である。同書によれば、媽祖はもともと実在の女性であり、宋の建隆元年(960)三月二十三日に福建・莆田の湄州島で都巡官の任に当たっていた林愿という人物の七女として出生し、「默娘」と呼ばれていたという。彼女は十三歳で道士に秘法を授けられ、十六歳で井戸から符を得て靈力を身につけるなどし、雍熙四年(987)九月九日に「羽化昇天」したという。媽祖の誕生日にあたる旧暦三月二十三日と「昇

天」の日にあたる旧暦九月九日は、現在でも媽祖信仰の主要な節日とされている。

媽祖伝承について記した史料は『天妃顯聖録』以外にも散見され、それらの記述を総合すると、媽祖は 10 世紀後半ごろの人物であったと推測されている。また、多くの史料において、媽祖がもともと「人の禍福を言う」巫女であったことが示唆されており、「昇天」した彼女を、11 世紀後半までに福建の莆田地方の信者たちが「媽祖」として廟祀するようになったと考えられている。

媽祖信仰は、その後、さまざまな寓話・伝記・靈驗談を成立させていった。その代表的なものの一つが、高麗遣使船をめぐる靈異譚である。宣和五年（1123）、高麗への遣使船八隻のうち、媽祖を祀った船が遭難を免れるという出来事があり、その奇跡が朝廷にも聞こえ、徽宗から「順濟廟」の額を賜ったという。

また、南宋の洪邁が編纂した説話集『夷堅志』には、林夫人すなわち媽祖の廟をめぐる信仰の一端が次のように記されている。

興化軍の境内の海口というところに古くから林夫人廟があり、何年に立てられたものかわからず、室宇はそれほど廣大なものではないが、靈異は素から著われていた。およそ賈客が海に入る際には、必ずこの祠で祈禱し、占いを行って保護を祈ってから出発した。それは、かつて大洋に至って悪風に遇ったとき、遙かに（廟を）望んで百拜し憐みを乞うと、神が檣竿に出現するのを見た者があるからである。（『夷堅志』内卷九「林夫人廟」）

もともと福建莆田における在地の信仰対象であった媽祖は、先述の徽宗による賜號に端を発し、歴朝の皇帝らから號を受けたことにより、いわば国からの「お墨付き」を与えられた。媽祖信仰がしだいに「全国区」の信仰へと発展していった一因はそこにある。なお、南宋以降の賜號の件数と主な事例をまとめると次のようになる。

南宋（一七件）	高宗	→「崇福夫人」
元（五件）	世祖クビライ	→「護国明著靈惠協正善慶顯濟天妃」
明（二件）	永樂帝	→「護国庇民妙靈昭応宏仁普濟天妃」
清（八件）	康熙帝	→「昭靈顯応仁慈天后」

ところで、媽祖信仰がその信仰圏を拡大させていったもう一つの要因として従来指摘されているのは、モンゴル元代における海運の発達である。元朝のもとでは、南宋を併合した世祖クビライ期以降、海運事業が開始された。これは、江南の糧食を北方の大都首都圏に向けて輸送する一大国家プロジェクトともいえるものであったが、その開始当初、海難事故の絶えないことが問題となっていた。そこで、航海の安全を祈願するために媽祖の加護を仰ぐようになったのである。当時、媽祖以外にも各地で崇奉されている海神は存在したが、そのなかでも媽祖が選択されたのは、海運船や水夫の多くが媽祖ゆかりの福建とりわけ莆田の出身であったためと考えられている。媽祖を祀る廟すなわち天妃宮は、北は直沽（現天津）から南は海南に至るまでの各所に創建され、その信仰も沿岸部を中心にきわめて広い範囲に及んだ。媽祖は、上述のような皇帝による賜號ともあいまって、国家祭祀としての側面を持ちつつ信仰圏を拡大させていったのである。

例えば、元の鄭元祐の撰した「重建路漕天妃宮碑」には、浙江地方の劉家港における運糧船の出航に際し、江浙行省や海運萬戸府の官員たちが参列して営まれた劉家港の天妃宮における祭祀儀礼の詳細が次のように描写されている。

蓋し海舟は毎歳春夏の運糧の時期になると、ことごとく劉家港に集まる。路漕はまことに港の要衝にあたり、それゆえ天妃宮のうちでも路漕にあるものはまことに広々としていて華麗であり、他祠を凌ぐものである。國家は漕餉を重んじ、既に漕府を呉の地に開いた。毎年江浙省の宰臣一人を分派して漕運を監督している。轉漕の際には、宰臣が必ず自ら漕臣・守臣たちを率いてみな祠下に集い、吉を妃に占って、吉トが得られたら、然る後に港で順次出航するのである。天妃の官が、刑馬椎牛し、享禮の儀式を行う。生け贄の肉、饗料の美酒、美味の数々を並べ終わると、弦楽の音に鐘磬が加わり、さらに簫管もこれに和すと、それらの音は響き渡って雲にしみ入る。そして舞樂が終わると、冷風が蕭然と吹き渡って境内を充たす。虎臣卒徒は舟を擡ぎ帆を揚げ、太鼓や銅鑼を打ち鳴らす、その音は川陸に響きわたり、文武の官員たちは厳かに整列し、人びとは船が出航していくのを見守るのである。（『僑吳集』卷十一「重建

路漕天妃宮碑」)

やや時代が下って、明の永楽帝の時期に行われた鄭和の南海経略の際にも、航海者たちは劉家港から出帆するたびに媽祖の神助を仰ぎ、これを永楽帝に奏上していたという。明末から清代にかけて、華人たちが福建地方などから南洋へ向けて盛んに進出するようになると、媽祖の信仰圏はさらに拡大し、それとともに媽祖は航海神としてだけでなく万能神へとイメージを変化させていった。

もともと東アジアの海域には、多様な水神・海神信仰が各地に見られたが、とくに元代以降、それらの中に占める媽祖の地位は圧倒的に上昇し、既存の水神・海神たちを淘汰したり、これらを付き従えたりするようになっていった。例えば、千里眼と順風耳、四海龍王、招宝七郎、晏公、拏公などの諸神が媽祖の配下に入ったといわれる。これらの諸神の一部は、後述するように、台湾における媽祖の巡礼行列にも登場する。

以上のように、中国の福建地方に起こった媽祖信仰は、その信仰体系を整えながら東アジア海域各地へと拡大し、その結果、「媽祖文化圏」ともいえるフィールドを成立させていった。「媽祖文化圏」における信仰の主体は基本的に華人たちであり、媽祖信仰は彼らの人的ネットワークの広がりや密接な関係にあった。一般に、華人ネットワークを支える紐帯として「血縁、地縁、業縁、神縁、物縁」すなわち「五縁」という表現が用いられることが多い。このうち媽祖は「神縁」に属するものといえよう。

3 今日の媽祖廟と媽祖信仰

今日の世界において、媽祖廟の分布は、中国の福建地方とその対岸に位置する台湾に集中しているが(図1)、それだけでなく、東アジアや東南アジアはもちろん、ヨーロッパや南北アメリカ、南アフリカなどにも広がっており、世界29カ国に約5,000座の媽祖廟が建てられ、約2億人の信徒が存在するといわれる。

日本列島の各地にも媽祖廟やその痕跡が見られ、南は沖縄から北は青森の大間にまで分布している(図2)。華人ネットワークと深い関わりを持つ日本の媽祖廟としては、長崎の崇福寺や横浜の媽祖廟などが挙げられる。また、江戸時代に水戸藩主徳川光圀の招いた中国の禅僧・東皐心越が、大陸から媽祖の像をもたらした



図1 中国福建・台湾の主要な媽祖廟

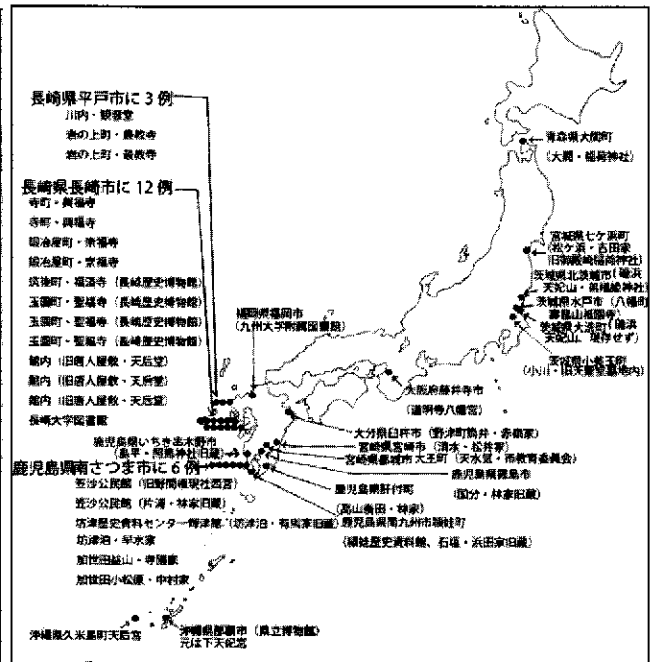


図2 日本列島における媽祖廟の分布 (高橋誠一 2009 より転載)

という言い伝えがあり、同僧ゆかりの祇園寺(水戸市)の本堂には厨子に収められた天妃尊が現存している(図3)。さらに、その周辺の茨城県各地にも大洗天妃神社(弟橘比賣神社、大洗町)、磯原天妃山(弟橘媛神社、北茨城市)(図4)など、媽祖に由来するといわれる神社が点在している。

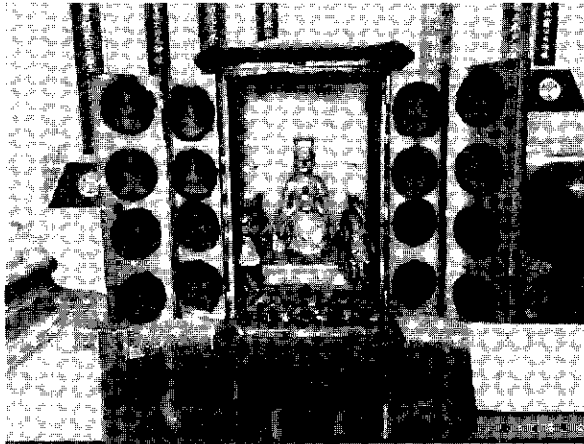


図3 水戸市・祇園寺の天妃尊



図4 磯原天妃山の社殿

一方、媽祖生誕の地である福建の湄州島は、現在、祖廟の地として多くの信仰者たちを集めている。外周約30kmの同島内には太子殿や朝天閣などを中心として数多くの媽祖廟が立ち並んでおり(図5)、島の頂上には高さ14mの白亜の媽祖像(図6)が設けられ、湄州島の新たなシンボルとなっている。とりわけ媽祖の誕生日にあたる旧暦三月二十三日の前後には、中国東南沿岸各地はもちろん、台湾などからも多数の信徒たちが巡礼(進香)に訪れ、湄州島に向かう船内には、各地で崇拝されている媽祖像を大切に抱えた信徒たちの姿が見られるという。これは、後述するように、媽祖にとって「里帰り」の意味を持っている。

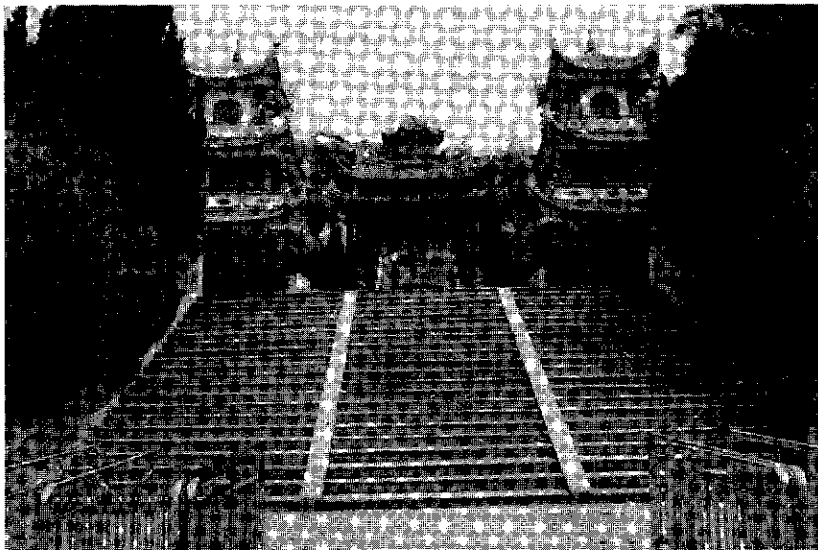


図5 福建湄州島の媽祖祖廟

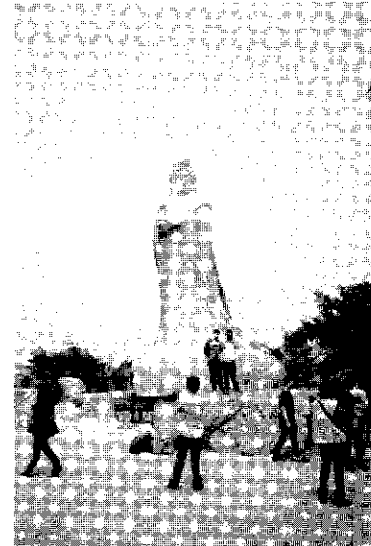


図6 湄州島の媽祖像

ところで、徐曉望氏によれば、歴史的に見て、媽祖の祖廟を名乗る廟は、湄州廟だけでなく、聖墩廟・白湖廟も含め、福建の莆田に三箇所存在した。モンゴル元朝の時代、このうち湄州廟と聖墩廟が祖廟の地位をめぐって争っていたが、モンゴル政権の使者が湄州廟を訪れて祭祀を行ったことにより、その祖廟としての地位が確立したという。このことも媽祖の「官の信仰」としての側面を表すものといえよう。

湄州島をいわば聖地とする大陸における媽祖信仰は、文化大革命の時期に弾圧を受けたが、そののち復活を遂げた。2009年にはユネスコ無形文化遺産に指定されるなど、媽祖の認知度は内外でとみに高まり、現在に至っている。

4 台湾の媽祖巡礼

福建の対岸に位置する台湾は、媽祖がきわめて盛んに信仰されている地である。歴史的には、明末以降、清代にかけて、福建の人口が飽和状態になったことなどによって、人びとが台湾・東南アジアなど各地へと拡散し、それとともに媽祖信仰も広がりを見せた。台湾に渡った華人の移民たちは、無事に海峡を渡ることができた媽祖の神助に感謝して次々と祠廟を建立した。それらの媽祖廟は、華人移民たちの信仰の場であったのはもちろんのこと、彼らの精神的紐帯の象徴としての意味も持つようになった。今日の台湾においては、媽祖だけでなく、福德正神、王爺、観音、玄天上帝、関帝といった他の諸神も人びとの信仰を集めているが、とりわけ台湾中南部の人びとの媽祖への信仰心は篤く、廟だけでなく家庭の中にも広く祀られており、中には観音と合祀されるケースもあるという。

台湾の媽祖信仰において特徴的なのは、旧暦三月二十三日の媽祖聖誕節前後に、各地の媽祖廟において多彩な巡礼（進香）が行われていることである。なかでも大甲鎮瀾宮や北港朝天宮、白沙屯拱天宮などの媽祖巡礼はよく知られており、これらの著名な複数の祖廟は、各々が多数の子廟群を従えており、それぞれ特色のある巡礼行事を催しているのである。

松平誠氏によれば、台湾の媽祖巡礼を社会学的に分析すると、次の4つの類型を確認することができるという（松平1994）。

- ①基本型 =子廟の神が祖廟に赴き交香
- ②遍路型 =信者たちが諸廟を巡回
- ③巡り媽祖型 =祖廟の神が子廟を巡回
- ④里帰り型 =祖廟が上位祖廟に帰郷

例えば、雲林県の北港朝天宮における「北港朝天宮迎媽祖」は、上掲の類型①にあてはまる巡礼行事である。北港朝天宮の運営に普段から携わる董事会・炉主・神明会は、巡礼の時期に近くなると、同廟とその周辺を聖地として演出するために、遶境や北巡・南巡といった儀式を行う。そこに子廟やその信者たちが各々の廟や家に祀られている媽祖像を掲げ、こぞって巡礼してくるのである。こうした巡礼は一般に「進香」と称され、具体的には、割火（ないし刈火）すなわち子廟の子神が祖廟の母神に謁祖し、交香することにより、子廟の神性を再賦活させることを意図している。これは日本の神社における勧請や分霊に類する儀式ともいえよう。

一方、台中北西部の大甲鎮瀾宮（図7）を発着地とする巡礼行事「大甲鎮瀾宮遶境進香」（図8）の場合は、上掲の類型③に加え、②、④の要素も看取することができる。大甲鎮瀾宮は、清代の雍正八年（1730）に福建湄州島の林永興が祖廟の香火をもたらしたのが起源とされ、それゆえ、台湾における主要な媽祖廟の一つに数えられる。また、大甲五十三庄と呼ばれる台中諸村の人びとにとって信仰の中心を成しており、そこには主神にあたる媽祖以外にも観音菩薩、十八羅漢、神農などが祀られている。かつては十二年に一度、湄州島の祖廟への里帰りを行っていたが、19世紀末に日本統治が始まると、大陸との往来が禁止されたため、巡

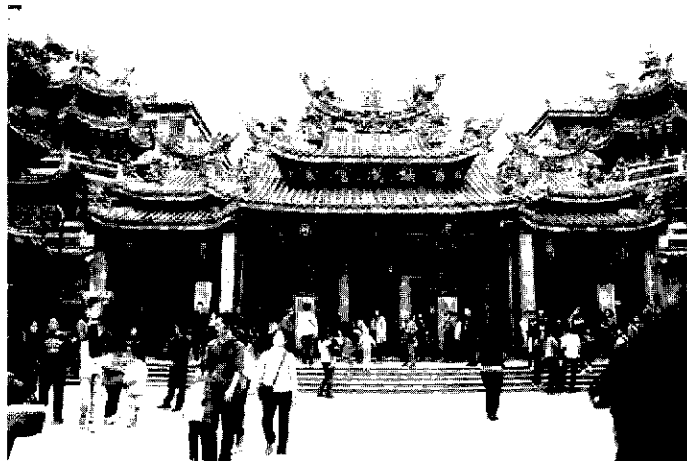


図7 大甲鎮瀾宮



図8 大甲鎮瀾宮遶境進香の巡礼行列
(游淑瑤 2014 より転載)

礼活動は台湾島内に限定されるようになった。そして、大甲鎮瀾宮の媽祖像を載せた神轎が、八泊九日をかけて約120の子廟を巡回する現在のような形になったのである。これは、典型的な③巡り媽祖型の巡礼であり、祖廟の神が子廟を巡回してそれらの神性を再賦活化する意味を持っている。しかし、それだけでなく、巡礼に参加する信者たちが祖廟の媽祖とともに諸廟を巡回する②遍路型の要素も兼ね備えているのである。

これら台湾の媽祖巡礼において興味深いのは、松平氏も指摘するように、聖地の祖神はあくまでも神火・神灰を授ける存在であり、祈願の対象となる神聖な絶対者であるとは限らないという点である。すなわち、聖地そのものを決定する主体が、神の側ではなく人の側にあるともいえる。例えば、大甲鎮瀾宮の媽祖巡礼は、かつて大甲から南に向かい北港朝天宮に赴いていた。ところが、大甲鎮瀾宮と北港朝天宮の運営者の関係がこじれたため、1988年以降、巡礼ルートが北港朝天宮から直線距離にして5kmほどしか離れていない新港奉天宮に切り替えられた。一方、北港朝天宮では、前述のように、「北港朝天宮迎媽祖」とよばれる独自の巡礼行事が行われているのである。つまり、台湾の媽祖廟には、由緒の正しさを競い合う祖廟が複数存在するが、それらの関係は総じて相対的であり、なおかつ「祖廟—子廟」という統属関係も人為的な要素によって組み換えられる可能性があるのだ。1987年には、媽祖昇天一千年記念行事として、台湾全島を巡る媽祖遶境団が組織されたり、大陸との関係が好転したことを背景として、1988年には最上位の祖廟にあたる福建の湄州廟への進香団が組織されたりしたことも、台湾における媽祖巡礼の融通無碍な特質の一端を示している。このような巡礼地・巡礼路の変性は、必ずしも媽祖の聖性が軽んじられていることを意味するわけではなく、台湾の媽祖信仰には多様なコミュニティに属する人びとの紐帯を象徴する要素が深く刻まれており、それゆえにコミュニティの多様性を反映して媽祖巡礼の活動も複雑かつ重層的な様相を呈していると理解することができよう。

さて、「大甲鎮瀾宮遶境進香」を例にとって、現在の台湾における媽祖巡礼の特質の一端をとらえてみたい。かつてこの巡礼は、中高年層を主体とする一部の熱心な信者たちによって守られてきたが、近年、政界やメディアが巡礼の運営に積極的に参与するようになり、もはや国民的な行事になった。テレビを通じた実況中継が行われたり、媽祖の神輿にウェブカメラやGPSの装置が搭載され、インターネット上で動画が配信されたりすることもある。近年では若者の巡礼者の姿がとみに増えつつある。そして、巡礼の規模は巨大化の一途を辿り、現在では、約百万人の参加者が八泊九日をかけて各地の廟宇を巡りつつ約340kmの行程を歩く一大行事となっているのである。

例年、巡礼の日程が確定するのは旧暦一月十五日の元宵節である。この晩、筭筭と呼ばれる占いによって媽祖聖誕の旧暦三月二十三日前後の日程で出発の日取りが決められる。その後、豎旗、祈安、上轎といった典礼の儀式を経て、起駕すなわち巡礼行列の出発がとり行われる。巡礼行列は台中市北西部の大甲鎮瀾宮から出発して南に向かい、彰化県、雲林県などの廟宇を次々と通過し、最初の三日で嘉義県の新港奉天宮へと辿り着く。新港奉天宮では、到着した媽祖の御神体が信者たちによって手渡しで神棚に運ばれて二晩そこに留まり、さらに五日間かけて北上し再び大甲鎮瀾宮に戻り、最後に安座の儀式をもって一連の巡礼行事が幕を閉じるのである。

媽祖の神輿すなわち媽祖鑾轎を担ぐ巡礼行列は、主として大甲五十三庄の信徒たちから構成される。報馬仔と呼ばれる先触れを筆頭とし、開路鼓と呼ばれる太鼓隊や哨角隊と呼ばれるラッパ隊、福德弥勒団・弥勒団・太子団・神童団・莊儀団（千里眼と順風耳、図9）など、媽祖にまつわる諸神のかぶり面をしたさまざまなキャラクターが行列を彩る。媽祖鑾轎じたいは行列の後方に位置し、その後に続く白いワイシャツと赤いネクタイがトレードマークの自転車隊が行列の最後尾を守る形となっている。そして、これらのいわば公式の媽祖行列を取り囲むようによろしく、無数の信徒



図9 大甲鎮瀾宮遶境進香の莊儀団
(左：順風耳、右：千里眼、游淑瑤 2014 より転載)

たちが巡礼行列を形成する。

巡礼者の基本スタイルは徒歩だが、マラソンや自転車、スクーターの巡礼者、マイカーやトラックの荷台に乗った巡礼者らが、個人で参加したり、進香団を組織したりするなど、思い思いの手段・方法・いでたちで巡礼行列に加わっている。巡礼路沿いの人びとは、巡礼者たちの食事や仮眠場所を積極的に提供し、四国遍路に見られる「お接待」と同じような光景がそこかしこで見られる。また、巡礼行列の通過地では、沿道の人びとが各地の郷土芸能で媽祖や巡礼者たちを出迎えるなど、さまざまなイベントが開催される。つまり、移動する巡礼行列の周囲には、つねに賑々しい巡礼の周辺領域が作り出されているのである。また、媽祖の神輿が近づくと、沿道の人びとは先を競って地面に伏せる。これは鑽轎脚(図10)と呼ばれ、媽祖の神輿に跨られると福が来るとのことから始まったとされる風習であり、日本各地でも見られる神輿くぐりと同様の意味を持っている。



図10 鑽轎脚(游淑琇2014より転載)

大甲鎮瀾宮の媽祖巡礼は、年に一度、媽祖の聖誕節前後に、一時的・集中的に行われる行事である。この点において、巡礼の時期がとくに定まっていない四国遍路とは大きく異なる。また、四国遍路の巡礼者が身につける白衣のような装束こそ決められていないが、大甲鎮瀾宮遶境進香の巡礼者であることを示す進香旗を携行するのが一般的である。巡礼者たちは、廟を次々と巡礼して平安符と呼ばれるお札を受け取り、一枚ずつ進香旗に結びつけていく。この点も、納札を各寺院に納めつつ巡る四国遍路とは趣を異にしている。ただ、先述のように巡礼者をもてなす「お接待」が盛んなことや、若年層の巡礼者が増えつつあること、巡礼者にとって「潔化」すなわち身を綺麗に保つための禁忌があることなど、いくつかの共通点も見出すことができる。

5 おわりに

以上に述べてきたように、媽祖信仰は、10世紀末ごろの中国福建地方で始まり、現在では台湾をはじめ世界各地に広く展開している。媽祖の祖廟にあたる福建の湄州島には、例年多くの信者たちが里帰りの巡礼に訪れるが、他方、海峡を隔てた台湾においても、大甲鎮瀾宮遶境進香のような巡り媽祖型・遍路型の特色ある巡礼行事が盛んに催されている。これらの媽祖巡礼の特質や、四国遍路との厳密な比較、世界の巡礼に占める位置づけ等については、依然多くの検討すべき点が残されている。今後の課題としたい。

《主要参考文献・サイト》

- 陳佳秀 2012 「台湾の媽祖信仰についての一考察：その意味象徴の変遷をめぐって」『鹿児島国際大学大学院学術論集』4.
- 藤田明良 2006 「日本近世における古媽祖像と船玉神の信仰」『近現代日本社會的蛻變國際研討會論文集』中央研究院人社中心亞太區域研究專題中心.
- 平木康平 1984 「媽祖と観音」『大阪府立大学紀要(人文編)』32.
- 窪徳忠 2001 「余滴 媽祖信仰の拮がり」『歴史と地理』541.
- 窪徳忠 2002a 「媽祖信仰(1) 媽祖信仰の起源と伝播」『アジア遊学』37.
- 窪徳忠 2002b 「媽祖信仰(2) 中国の媽祖信仰」『アジア遊学』39.
- 窪徳忠 2002c 「媽祖信仰(3) 台湾の媽祖信仰」『アジア遊学』40.
- 李献璋 1957 「元・明の地方志に現れた媽祖伝説の演変」『東方学』13.
- 李献璋 1962 「元代の封祭から見た媽祖の航海神化」『仏教史学』10-2.
- 李献璋 1993 『媽祖信仰の研究』泰山文物社.

- 李玉昆 1988 「媽祖信仰の形成和發展」『世界宗教研究』1988-3.
- 林国平（土居智典訳）2007 「福建海神信仰と祭祀儀式」『東アジア海域交流史 現地調査研究～地域・環境・心性～』2.
- 林美容 2006 『媽祖信仰與臺灣社會』博揚文化有限公司.
- 松平誠 1994 「台湾の聖地 — 媽祖信仰におけるカミとヒトの道」『女子栄養大学紀要』25.
- 松本浩一 2004 「船人たちが伝えた海の神-媽祖信仰とその広がり」『アジア遊学』70.
- 森田清美 2000 「媽祖と民間信仰についての一考察 — 修験と媽祖」『宗教民俗研究』10.
- 二階堂善弘 2010 「長崎唐寺の媽祖堂と祭神について — 沿海「周縁」地域における信仰の伝播—」『平成 17～21 年度文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究 東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成-寧波を焦点とする学際的創生-研究成果報告書』第 4 巻.
- 愛宕松男 1943/1987 「天妃考」『滿蒙史論集』4（再掲：『愛宕松男東洋史学論集』2）.
- 坂出祥伸 1990 「台湾の媽祖信仰」『関西大学中国文学会紀要』11.
- 高橋明郎 2012 「民國 100 年北台媽祖文化節について」『香川大学經濟論叢』85-1・2.
- 高橋誠一 2009 「日本における天妃信仰の展開とその歴史地理学的側面」『東アジア文化交渉研究』2.
- 吳漢恩・楊宗祐 2014 『台灣迎媽祖 一生必走一次的朝拜之旅』晨星出版.
- 徐曉望 1993 『福建民間信仰源流』福建教育出版社.
- 徐曉望 1999 『媽祖的子民 閩台海洋文化研究』学林出版社.
- 徐曉望 2006 『媽祖信仰史研究』海風出版社.
- 矢澤知行 2013 「モンゴル時代の中国における祭祀と巡礼」『巡礼の歴史と現在』岩田書院.
- 游淑琚 2014 『大甲媽祖遶境進香』文化部文化資產局.
- 朱天順 1996 『媽祖と中国の民間信仰』平河出版社.
- 2014 大甲媽祖遶境進香 全紀錄 I (<https://www.youtube.com/watch?v=w9Nks8BIYnQ>)
- 2014 大甲媽祖遶境進香 全紀錄 III (<https://www.youtube.com/watch?v=6nVWHVuwkFk>)
- 2014 大甲媽祖遶境進香 全紀錄 V (https://www.youtube.com/watch?v=vG_XBMuGnRg)
- 70 年代大甲媽祖往北港進香（一）(<https://www.youtube.com/watch?v=5V7y0coLMRU>)
- 70 年代大甲媽祖往北港進香（二）(<https://www.youtube.com/watch?v=qUmwdctatkg>)